保育者養成における保育実践力育成に関する研究―Ⅲ

―コロナ禍におけるリモート型の交流―

吉　江　幸　子

星槎道都大学研究紀要

社会福祉学部

第 2 号

2021 年

The Bulletin of Seisa Dohto University, Faculty of Social Welfare
No.2, 99－104, 2021

保育者養成における保育実践力育成に関する研究―Ⅲ

―コロナ禍におけるリモート型の交流―

吉　江　幸　子

要約

保育士養成校には，多様な保育事情を踏まえ，さまざまな保育環境に対応できる保育実践力を身につけた学生を育成することが求められている。その中でCOVID-19の流行は，保育環境をどのように整えられるかと言う課題を突き付けられることとなった。このことは保育現場及び養成校の課題とも言える。

そこで本研究は，保育園児と大学生のリモート交流を実施し，間接的交流の効果について検証した。その結果，双方の安全性を確保しながら交流する方法も可能であることが分かった。また，学生の計画立案に対する意識向上やリモート交流の課題発見にもつながった。

１．研究の目的

保育現場には，通常の保育以外にも多様な保育サービスが実施されている。その内容は延長保育，休日保育，夜間保育，病児に対応した一時預かり保育等複数のニーズに沿った子育て支援のサービスである。保育士養成校には，このような保育事情を踏まえ，さまざまな保育環境に対応できる保育実践力を身につけた学生を育成することが求められている。その中にあって，2019年の末に新型のウィルスが確認され，2020年２月には世界保健機関がパンデミックを宣言したCOVID-19（新型コロナウィルス感染症の正式名称．以下「コロナ」とする）の出現は，保育現場においても混乱をきたしたことは言うまでもない。

厚生労働省子ども家庭局保育課においても2020年１月29日付「新型コロナウィルスに関するＱ＆Ａ等の周知について」の第一報が発信され，以降「保育所等における新型コロナウィルス対応関連情報」が同年２月だけで10回以上，通知・事務連絡として周知されている。

保育所における感染症対策は，2018年３月改訂版のガイドラインに沿って健康安全に関する保育業務が進められているが，乳幼児が集団で生活する保育所等で子どもと密着する環境は避けられないのが現状である。現場において，子どもや保護者，職員の健康安全が保たれるよう予防対策の実施は必須であるが，このことは保育現場のみならず，養成校の課題とも言える。

そこで本研究では，新たな保育環境として，地域連携先の保育園児と大学生のリモート交流を以下の方法で行った。その結果について考察する。

２．研究の方法

星槎道都大学と地域連携協定を締結している由仁町（北海道夕張郡由仁町）にある保育園の年長児と，保育士をめざす学生との交流を対象とした。

2-1　対象及び交流日

三川保育園５歳児８名（学校法人由仁学園）
社会福祉学科子ども保育専攻３年生５名・４年生２名
2020年７月30日に実施

2-2　交流の方法

保育園と大学研究室双方のパーソナルコンピュータ（以下「PC」とする）を利用した。保育園側は，PCとプロジェクタを接続して大型スクリーンで投影し，子どもたちはイスの間隔を約１メートルとりながら座席指定にして１人ずつPCカメラの前に出て学生と交流する方法をとった。大学側も１台のPCをプロジェクタと接続して壁に投影し，PCを囲むように座りながら１人ずつ子どもに話しかける方法で実施した。

ツールは，Microsoft365コミュニケーションツールTeams（マイクロソフト社）によるリモート会議システムを活用し，保育園のメールアドレスにTeams会議の招待メールを送信してインターネットでつないだ。

事前に通信環境の確認を行い，リモートによる対面交流日を設定して実施した。保育園との打ち合わせについては表１のとおりである。

１回目の打ち合わせでは学生と園児の直接交流について話し合いを行い，感染症予防対策の観点から自粛で話が進められ，リモート交流を試みることとした経緯があ

表１　リモート交流の流れ

月日	内容	保育所の担当
６月 19 日	第１回交流事業打ち合わせ（対面，保育園を訪問）	園長・副園長・事務長
７月 10 日	第２回交流事業打ち合わせ（Teams 活用）	副園長・主任保育士
７月 28 日	第３回交流事業打ち合わせ（Teams で予行練習）	副園長・主任保育士
７月 30 日	交流会「学生とオンラインで自己紹介」	副園長・主任保育士

る。２回目の打ち合わせで Teams による接続確認，３回目は筆者（以下「担当教員」とする）が保育園に出向き，PC とプロジェクタ接続をサポートしながら，大学研究室で待機する学生１名とリモート交流の予行練習を行い，2020 年７月 30 日に交流会を実施した。

2-3　学生の事前準備

大学の授業自体が対面からリモート対応になったことで，学生の事前準備もリモートで実施した。

学生に対しては，交流の流れを計画すること，計画案は保育実習で使用している指導案様式を利用すること，30 分間の指導計画を立案するという課題を提示し，案として出来上がったものを表２に示す。

指導案作成にあたっては，担当教員からタイムスケジュール及び導入と結末をどのようにするかといった最小限の助言を行ない，計画と実践，事後評価を学生が感じ取れるよう配慮した。

指導案以外の準備は表３及び写真１のとおりである。

2-4　保育園側の事前準備

保育園には，指導案，準備物の説明をメール及び電話で実施し，予行練習日に質問カードを持参し，事前に子どもたちが質問を読み上げる練習を実施した。

表２

園　　名　三川保育園
学生氏名　星槎道都大学３年生・４年生

星槎道都大学　指導案

令和　2　年　7　月　30　日（木曜日）		クラス名　三川保育園児　　組（５歳児）　８名	
ねらい	お兄さん，お姉さんの質問にこたえたり，お話しして楽しむ。	内容　オンライン交流「自己紹介」	準備物　・パソコン　・質問項目用紙 ・質問 BOX と手作りマイク

時間	実習生の活動	子どもの活動	環境構成
13：15	●パソコンの準備を始める		
13：30	●司会者が始めのあいさつをする ひげじいさんの指遊びをする これから行うことの説明をする	●子どもたちが司会者に反応する。 パソコンの画面に注目して，一緒に手遊びをする。 司会者の話を聞く。	スクリーン PC/プロジェクタ 子ども　子ども
13：40	●自己紹介を始める ・学生１ ・子ども１ ・学生２ ・子ども２　…以降組み合わせ 学生と子どもが交互に自己紹介をする。 学生は，子どもからの質問にこたえ， 子どもたちは学生からの質問にこたえる。	●学生の自己紹介を聞いてから，マイクを持ってパソコンの前に行き，質問 BOX から質問用紙を引いて，保育者がサポートしながら学生に質問をする。 質問後は紙を BOX に戻す。 ●子どもたちも自己紹介し，学生からの質問にこたえる。 質問内容に困っているようなら保育者がサポートする。	子どもたちの自己紹介の順番は，保育者に決めてもらう。 学生１が自己紹介 ↓ 子ども１が自己紹介 ↓ 学生１が子ども１に質問 ↓ 子ども１が学生１に質問
13：5★	●司会者が終わりの挨拶をする。	●司会者の話を聞き，画面に映る学生に手をふったり，声をかけたりする。	
14：00	●交流会終了　記念撮影。	●学生が映るスクリーンの前に並び，記念撮影。	この繰り返しで実施する。

全国保育士養成協議会北海道ブロック様式

表３　学生側の事前準備（制作物）

準備項目	内容
質問紙 カード	子どもが学生に質問しやすいよう，あらかじめ質問内容を書いた紙を用意する。 ・すきなたべものはなんですか，すきなキャラクターはなんですか等人数分 ・ひらがなで記入，**紙を持ちやすいように**※1 厚紙に貼たもの
マイク	インタビュー用にマイクを手作りする。 ・素材はラップ芯・果物ネット（ポリエチレン製）等廃材を活用 ・子ども１人に１つ，学生側にも用意
質問 BOX	質問紙を取り出しやすいように箱を用意する。 ・空き箱を利用し，郵便ポストのようにスペースを開ける ・犬の絵を描いてラミネートし，空き箱の側面に貼る
立ち位置 マーク	PC の前に出てくるため，立ち位置を表示するものを床に貼る。 ・足跡マークを印刷し，ラミネートする

３．結果

実施当日，担当教員は保育園に出向き，PC 操作のアシストを行った。

保育園側に送信した Teams 会議システムの招待メールにアクセスし，学生が待機する大学研究室と接続確認を行った。

この時刻は交流開始の 20 分前である。この段階から子どもたちは席についていた。

接続開始後スクリーンに学生たちの顔が映し出されると，子どもや保育士から歓声があがった。

司会担当の学生が始まりのあいさつ，導入の指遊び，交流方法を説明した。

その後，保育士のサポートで子どもの名前が呼ばれ，一人ずつ立ち位置マークの前に立ち，質問用紙を開いて PC に向かって質問した。その質問に学生が回答し，続いて学生が子どもに質問するやりとりが８回続いた。

最後に，学生と一緒に記念撮影をするため，子どもたちはスクリーンを囲むように集まり，学生も PC 画面のカメラ前に集まって園側のスクリーンに全員の顔が入るように位置し，撮影して終了した。

終了後に学生は，事前に作成した指導案に不足していた部分（子どもの活動，実習生の活動）や自己評価をひとりずつ記入し提出した。

その結果，接続状態でタイムラグが発生し，子どもの声が遅れて聞こえたり，静止画になったりしたことがわかった。保育園側は画像の乱れもなく進んだ。

４．考察と課題

4-1　交流開始前

初めての試みであるリモート交流でいちばんの心配は Wi-Fi 環境にあった。交流開始 20 分前から接続確認をしたが，双方の画像を確認するまでに 15 分程度かかった。双方の顔が映し出されて上がった歓声は，保育士や学生にとっては安堵の歓声であったことが自己評価から読み取れる。

写真１

開始前の準備で注目したいことが，保育園側に用意した質問カードである。

表３の※１に示したように，質問カードを持ちやすいように厚紙に貼って用意したが，保育士たちは，子ども一人ひとりが持ちやすいようにカードを持った時の指の位置マークを書いていた。このような工夫により，子ども自身がカードを手に取った時にどの位置で持つと文字が見やすいかがわかる。大人のサポートがなくても自分でできるという自信につなげる支援の方法であることが理解できる工夫である。

4-2　交流実施

交流は 30 分間を予定し，時間の中で終えることができた。学生が提出した指導案の環境構成で示された座席ではなく，子ども同士が対面にならないよう配慮され，全員が前面を向く椅子の配置であった。子どもたちは開始前から着席していたため，概ね１時間近くスクリーン

に向かっていたことになる。各自の出番は３～４分程度であり，30 分間以上着座姿勢で拘束される状態となった。コロナ禍でなければ，PC の前に集まったのではないかと推察する部分でもある（写真２）。

交流時間中，学生側の対応は終始笑顔であり，ゆっくりとした口調でわかりやすく話しかける様子を観察することができた。

大学側ではカメラで撮影するよう学生に依頼して記録したが，写真３でわかるように，PC 画面に向かって質問内容を表示している。このことにより，音声が途切れたとしても子どもたちは見ることができるし画像が途切れたとしても音声で読み上げることができる。事前の指導案では想定していなかった項目である。

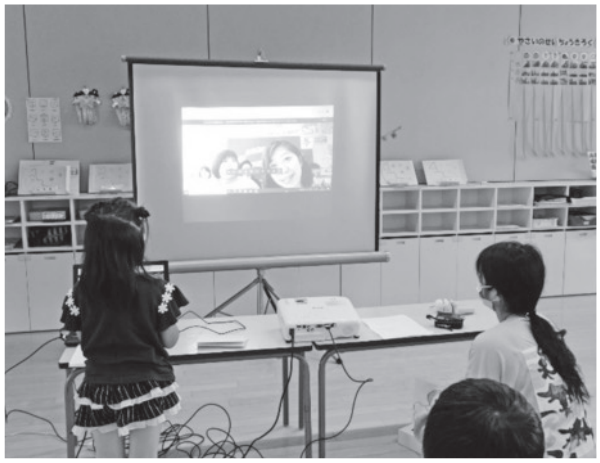

写真２

4-3　交流後の自己評価

各学生には研究室で反省会と自己評価用紙の記入を課題とした。

担当教員が保育園から大学に戻るまでに１時間程度かかったがその間，学生たちは課題に取り組んでいた。どの学生も，事前に空欄が目立った指導案に多くの反省や気づきを記入していた。

学生 A さんの記録は表４の通りである。**太字と下線**で示したように，嬉しいという学生の感情表出が複数みられ，直接交流や次への期待が記録されている。また，実践しながら気づいた点をいくつか振り返っている。その内容は，遊びの説明時に具体的なもので示す方法，カメラを見ながら話す方法，子どもの話に対するリアクションの方法などである。このほかにも学生の実際の動きとして，オンラインで相手の顔が見えた時や終了時に手を振ってあいさつすることもそうであろう。「こんにちは」や「さようなら，またね」というあいさつを交わすとき，誰が話しかけているのかを知らせる合図が手を振る行為であり，指導案には載っていなかった行動である。

写真３

4-4　まとめ

今回のリモート交流が保育・教育にどのような影響があったかをまとめる。

まず保育士と子どもに対する影響として２つ挙げる。

１）ICT（情報通信技術）の活用による子どもの反応

PC，プロジェクタ，スクリーン等保育現場では非日常であるものに触れた時の子どもの反応を観察できる。

２）ICT の活用による保育士の反応

ICT 機器の活用をどのように保育現場や職務に取り入れるか考察ができる。

次に学生や教員に対する影響として２つ挙げる。

１）ICT の活用による学生の反応

テレビゲームやスマートフォン，タブレット普及時代に育った学生にとっては操作しやすいものである。

２）コロナ禍における保育実習の指導

2020 年度はコロナの感染状況によって保育実習の中止や延期が余儀なくされた。その代替として模索している保育実習の観察やリモート導入が可能。

4-5　課題

今回のリモート交流において，画像の乱れやタイムラグの発生は予行練習の際に支障がなかったため予見できなかった部分である。しかし，学生自身も反省時に留意が必要であることに気づくことができたという点では今後に向けた明るい材料と言えるだろう。

また，子どもの様子として，開始前から終了までの小一時間，着座状態でスクリーンを見ていることになる。我慢を強いられることにもなるため，楽しむという指導案のねらいが達成されたとは言えない。この姿は大学で発信している学生には見えない姿であったことから，今後は小型カメラやスマートフォンのカメラ機能との接続

表４

指導案・自己評価　感想　　学生氏名　　Ａさん

「ねらい」どおりでしたか？それとも「ねらい」を変えたり付け足したりすることがあれば記入してください。			
時間	実際の動き（子ども，保育者）	実際の動き（学生）	評価・感想・気づいた点
13：30	・画面に映る学生を見て反応する。 ・保育者は子どもの後方に立って支援する。	・画面に映っているか確認する。	・つながるまでに少し時間がかかった。 ・子どもたちの元気そうな顔を見られて**嬉しい気持ち**になった。
13：35	・あいさつを交わし，手遊びを始める。	・あいさつを交わし，今日行う遊びを発表する。	・あいさつの第一声が緊張した。
	・子どもたちは真剣に話を聞く。	・ひげじいさんの手遊びで導入する。	・一緒に手遊びをしてくれた。もう少し動作や**実際に使う道具を用いて説明**したほうが子どもたちに伝わりやすかったと反省した。
	・これから始まることに期待する。	・自己紹介ゲームの説明をする。	・タイムラグはあって大変だったが何とか対応したと思う。
13：40	○自己紹介ゲーム	○自己紹介ゲーム	・一生懸命に参加している子どもの様子をみて**とても嬉しかった**。
	・マイクを使ってあいさつする。	・自分の名前を伝え，子どもの名前を聞く。その後，質問 BOX からカードをひいて子どもに質問する。	・指導案を見過ぎていたのでもう少し**パソコンカメラに意識して話し**かけられれば良かった。
	・相手の名前をしっかりと聞き，学生の問いかけに対して上手に対応していた。	・質問が終わったら学生から子どもに質問をし，ありがとうのあいさつをして次の人に交代する。	・子どもの発表にもっと**リアクション**したほうが良い。
	・質問や発表も大きな声でハキハキと喋っていた。		・学生の問いかけに子どもたちが反応して手をあげたりしてくれて**嬉しかった**。
13：55	・画面に集中する。	・最後のあいさつをする。	・子どもたちの**気持ちが伝わってきた**気がする。
	・楽しかった？と問いかけられて子どもたちは手をあげる。	・子どもの様子を画面越しに観察する。	・直接，**会いたくなった**。
14：00	○撮影会	○撮影会	
	・楽しそうな声が聞こえる。	・パソコンに向かってポーズをとる。	・またオンライン交流に参加したい。
	・最後に笑顔でありがとうございましたと感謝の気持ちを学生に伝える。	・学生も皆，笑顔で過ごしていた。子どもたちのお礼の言葉を受け取り，学生も感謝の気持ちを言葉で伝える。	・とても良い経験になった。

で子どもに近づきやすくする工夫が必要である。

感染症予防対策のひとつに，他者と身体的距離をとり接触の機会を減らす，マスクの着用，手指消毒や洗浄が叫ばれている。しかし，乳児を抱きかかえたり，授乳したりおむつ交換等子どもの生命の維持を支える保育業務は，現状，密着なくしてできるものではない。そのことを考えると今回のようなリモート交流は，子どもの反応を観察するツールとしての効果はあるが，学生Ａさんの記録（表４）にもあるように，「直接会いたくなった」という対面交流の希望を引き出すものとなった。

リモート交流は双方にとって感染リスクをなくし安全性が保たれること，また，地域が限定されずに交流可能な方法である。実習やボランティアなど直接交流の事前学習としての活用，あるいは保育実習の代替措置として有効であることがわかった。

今後，リモート交流を企画する場合には，子どもの動きを取り入れる工夫が必要である。

謝辞

本研究は，地域連携協定締結先の由仁町にある学校法人由仁学園三川保育園の５歳児及び保育職員の方々の協力による成果です。コロナ禍においても受け入れにご協力くださった方々に深く感謝申し上げます。

〈参考文献〉

石橋裕子・林幸範編著（2015）．幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド．同文書院．

厚生労働省子ども家庭局保育課（2018）．保育所における感染症対策ガイドライン（2018 年改訂版）．

厚生労働省子ども家庭局保育課（2020）．新型コロナウィルスに関するＱ＆Ａ等の周知について．

Study on training practice ability of nursery care for nurturing teachers-III

― Remote-type involvement during the pandemic of COVID-19 ―

YOSHIE Sachiko

Abstract

Childcare worker training schools are required to train students who have acquired childcare practical skills that can respond to various childcare environments based on various childcare situations. Among them, the COVID-19 epidemic posed the issue of how to prepare the childcare environment. This can be said to be an issue for childcare sites and training schools.

Therefore, in this study, we conducted remote exchanges between nursery school children and university students. The effect of indirect exchange was verified.

As a result of this time, it was found that it is possible to interact while ensuring the safety of both parties. It also helped raise students' awareness of planning and discover issues for remote exchange.